

奈良 いのちの電話

2018
秋
第374号

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

事務局/〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp

特集 居場所のない子どもたちと

浜田 進士 氏



古刹 秋色 (橘寺)

牛田斐子画

道の
辺や

荊いばら
がくれに

野菊のぎく
さく

子規

風鐸



薬師寺の管主だった高田好胤師から昔「諸人よ思い知れかし己が身の誕生の日は母苦難の日」という歌を教わった。誰もが、胎内に宿してくださった38週間、いわゆる十月十日の苦勞、そして胎外に出る瞬間の母の苦痛に思いをいたし感謝しなさいということであった。

私事にわたるが、平成13年81歳で亡くなった我が母を思い出しては今も胸が熱くなる。病弱な父の看病や農作業に汗を流す我慢強い母であった。父が平成4年に亡くなっているから母は9年間一人暮らしだったが、突然医者からすい臓癌ステージ4を宣告されてそこから8ヶ月で逝ってしまった。

父には悪いが母を失ったときのほうが

ショックが大きく、今でも母を恋しく思う。亡くなる数ヶ月前、病院に見舞うと、母は「自分が漬けた白菜の漬物が食べたい」と言った。すぐに帰り、漬物部屋の桶から白菜を取り出し病院に戻って母に食べさせた。食欲が衰え痩せた母がかすかに笑みを浮かべながら満足げに食べている姿を見て嬉しかった。

その頃は国会にいたので思うように母に会えず今でも「あの白菜のお漬物をもう一度食べさせてやりたかった」と悔やまれる。病室では、テレビの国会中継で僕の姿を見つけては喜んでいたと言う。

僕と弟がまだ3~4歳の頃だ。二人そろって腸チフスにかかって死にかけてたことがある。母が泣きながら「どうぞ子どもを助けてやってください」と必死に拝んでいた姿が今もまぶたに焼き付いている。誰にとっても自分の母は世界一、かけがえのない母だ。

ところが、今の社会はどうだろう？

子どもに愛情が湧かないとか、虐待したり殺めたりというニュースが多い。もう20年以上も前だが、福祉国家と呼ばれるスウェーデンに行ったとき「この国ではゼロ歳児保育という言葉はありません。子どもが生まれたらお母さんは休職をして一年間は自分のおっぱいを含ませながら子育てに専念する、そして一年後保育所に預けて復職するのです」と実母の存在が生まれたばかりの子どもにとって如何に大事かを教えられた。帰国して保育所経営者の集まりでそのことを話すと一人の方からこっぴどく叱られた。「私たちは生後50日目から赤ちゃんを預かって母親の代わりに務めているのになんということをおっしゃるか」と。

どれほど仕事が大変かもしれないけれど、少なくとも一年間は子育てを優先するというスウェーデンを見習うべきと今も思う。(宏)

寄り添い人を訪ねて II



居場所のない子どもたちと



自立援助ホーム「あらんの家」ホーム長 浜田 進士 氏



浜田 進士 氏 プロフィール

奈良県山添村出身。子どもの権利条約総合研究所関西事務所長。関西学院大学教育学部准教授を経て、2013年より「あらんの家」設立に関わり、2015年よりホーム長を務める。

今回の特集では、去る6月に開催された第40回会員定期総会で記念講演をしていただいた浜田進士氏にお話を伺った。当日は「あらんの家」を見学させていただき、浜田氏ともう一人女性職員の方に、活動の原点ともいえる子どもたちへの思いや日常心掛けていることなどを話していただいた。

自立援助ホームとは

社会的養護を必要としながら、福祉、医療、労働、司法などの制度の狭間で支援を受けられなかった子どもたちが対象の施設で、具体的には児童養護施設を退所（高校中退などによる中途退所も含む）して、すぐには行き場の見つからない子どもや、家庭の崩壊や虐待などで居場所のない、15歳からおおむね20歳までの子どもたちを受け入れている。居所支援、生活支援、就労支援、社会的自立の促進などの支援をしている。「あらんの家」は奈良県で初めての自立援助ホームで、2013年開設。居場所のない子どもたちの「第二の家庭」として、これまでに23名の子どもを受け入れ、現在4名（定員男子6名）の子どもが入居している。

「待つこと」と「聴くこと」

ここに来る子どもたちは傷ついています。育った児童養護施設を出るとか、家庭に居場所がないということは「見捨てられ感」を強く持っているということで、そういう子どもと接するときには「親鳥とひな」のような接し方をします。これは、親鳥は卵を温めて、ひなが自分で殻を割って出てくるのを待つ、待たずに外からつつくとひなは死んでしまうという例えで、私たちは子どもたちの心を外からこじあけるのではなく、自分から心を開いてくれるのを待ちます。時間もかかるし、腹も立つし、何回も失敗を繰り返すが、それでもひたすら待ちます。腹が立った時にはその感情を素直に出すこと

で、子どもたちはいろんな大人がいることを知ります。「あらんの家」はホームなのかファミリーなのかといつも考えますが、私たちが子どもたち全員の母親、父親になることは出来ないし、家族だとか、父親だとかは思っていません。子どもたちとの距離感が難しいと思っています。

職員は交代で宿直します。当直の夜に誰かの話を聴いていると、他の子どもが気にしているのがわかります。2階でそっと聞いていたりします。別の子が話しているのを聞いて、自分も話が聞いてもらえるかどうか測っています。外部の人がお客さんとして来た時も同じで、その人がしゃべれる相手かどうか測っています。みんな自分が一番かわいそうなんだから、一番かわいがってほしいと思っています。だから人のことが気になる。自分の話を一番に聞いてほしい時は「死ぬ」という言葉を使います。または「仕事行かへん」と言います。そしたら「どうしたん？」と訊いてもらえることを知っているからです。私たちは子どもを特別扱いはしません。話があきらかに嘘だとわかっていても受け入れます。嘘は自分のことを大事にしてというサインだと思っています。時にカッとなった子どもが「指導員代われ」というような乱暴なことを言うこともあります。そういう時は言いたいだけ言わせ、吐き出させます。その場で收拾をつけなくてもいい、だんだんわかる時もあるから、曖昧なままでいいと思っています。私たちはどんなに悪態を吐かれても、明るく日は「普通」に接します。普通にお弁当を出したり、「いってらっしゃい」と言葉をかけます。そうすると、子どもは「昨日あんなにひどいことを言ったのにどうして？」と思うようです。「あらんの家」は家庭ではないが生活の場なので、日々そう接することで子どもが人との距離感に気づくこともあると思います。毎日の生活の中でそういうことが伝わるとしています。

子どもの自立と「あらんの家」がやること

自立とは、1人で生きていくことではないと思います。新たな依存先を見つけ、増やしていくことです。自分が否定されない居場所を持つこと。アイデンティティと、しっかりと土台を築くことなどで、私たちは「自立＝自律」と考えています。子どもたちの育ってきた家庭環境はさまざまで、例えば虐待する大人は、やっていることは滅茶苦茶だが理屈

は正しいことを言います。「こうあらねばならない」ということを強引に子どもに押し付けます。そういう環境で育ってきた子どもは「〇か×か」の答えを求めがちになります。生きていくのは「〇か×か」ではなく、「揺れる」ことなんだということ、を、「あらんの家」で知ってほしいと私たちは思っています。「あらんの家」にはいろんな考えを持つ揺れる大人がいるから、そういう大人に出会うことで生きることが少しでもわかってくれたらいいと思って、地域の活動やお祭りなどにも参加しています。支援してくれる方のご家族ごとおつきあいする中で、そこの不登校になった中学生にこの子が声掛けをするということもありました。子どもたちはいろんな家族、いろんな家庭があることを学び、逆に「頼りにされる」ことで大きく成長する機会になりました。相互支援ということ。新たな依存先を見つけるとは、働くことはもちろんですが、一緒に揺れてくれる大人を見つけることでもあるし、また良いパートナーを見つけることでもあります。



「あらんの家」を退居した子が電話をしてきたり、訪ねて来ることもよくあります。施設育ちで銀行に行ったことがないとか、物を買う時店員さんが怖いとか、そもそもどこに買いに行ったらいいのかわからないといったささいなことを訊ける大人が傍にいない子が多いです。仕事がんばってるからそれを褒めてほしくてやって来る子もいます。退居の際にいろいろな手続きをするとき20歳未満で親権者の同意書が要るような場合、親権者を捜すのが難しい。所在がわからなかったり、親が精神疾患だったり、姓が変わっていたりと、子どもにとって知らなくてもいいことまで知ってしまうことがあります。そんな時は精神的なフォローをします。インケアもアフターケアもメンタルケアもします。子どもたちのためにやることはいっぱいあると思っています。

.....

○取材を終えて

お話を伺うために「あらんの家」を訪ねたのは気温37度の猛暑の日でした。玄関から中へ入ると、そこには大量のたまねぎと大きな卓球台、そして夕食のハンバーグの良い香りが漂ってきて…。そこは別天地のように涼しくて、「家族ではない」と言いながらも、日々子どもたちに温かく寄り添う人たちのいる心地よい空間でした。

(M)

自立援助ホーム「あらんの家」

〒630-8114 奈良市芝辻町三丁目5番19号

TEL/FAX : 0742-33-2006

E-mail: arannoie@kcn.jp

<http://web1.kcn.jp/arannoie/index.html>

情報化社会のなかで考える

出会い 14

— 「出会い」「別れ」そして「この世」と「あの世」 —

関西福祉科学大学心理科学部 教授

川上 範夫

奈良いのちの電話の設立に向けて熱い心を傾けられた方々との「出会い」からすでに40年が経とうとしています。「いのちの電話」というものがどんなことを目的にしてどのような方法で何を指すものなのか、文字通り新しい「出会い」でした。なにしろ未知の経験領域でしたから戸惑いも大きかったのですが、自分は臨床心理学という専門から援助関係の実践についての学びのお手伝いや面接実践の修練に協力してくれればよいという要請に従って微力ながら関わらせていただけてまいりました。

その後40年、思い起こしますと若い時は不見識のゆえに自分も周りの方々もいつまでもお元気で永遠にお付き合いできるのではないかと思っていたように思います。それが近年、元理事長はじめ先輩役員の先生が相次いでお亡くなりになって、現在も少なからず抑うつ動揺の中にあります。ほぼ並行するように、私自身も心臓とか腎臓といった命に直結しかねない病気に見舞われまして、「永遠」とか「健康」が本来的に妄想的思い込みに支えられたものであったと思い知らされることになりました。この世との「お別れ」とあの世との「出会い」がそんなに遠くない案外身近なものと考えざるを得なくなりました。

青空を見上げているとあの世はあちらなのかなあ、といつの間にか思いめぐらせ、海の方こうに目を凝らしているとそうか、元はと言えばわれわれは海から上がって来たものらしいと妙に感慨に浸ったり、庭いじりをしていると、そうだ生き物はだれも残らずすれ土に還るものなのだと思心してみたりする機会が多くなってきました。さほど深い考えに基づいてのことではなく、要は「あの世」を地球自然に置き換えてみているに過ぎないのですが、病いに心までやられて寄り添えない不安にある時にはこのような取りとめのない彷徨いも意味あるかもしれません。

「いのちの電話活動」には自死予防とか自死遺族サポートなど、死にまつわるテーマが周りに横たわっています。若い時には思弁的に捉えるほかなかったテーマが徐々に自分のものとして受け止めることができるようになってきました。希死念慮を訴えられたり、自死された方の関係者の方とのカウンセリングでは死者の居場所としての「あの世」を大切にイメージして関わらせていただくことが必要と感じているこの頃です。 (協会養成委員長)